

緑に覆われているので、「鎮守の森」のような感覚に陥ることもある。ある意味で環境を破壊してつくった町に環境の保全をはかろうとする市民運動がおこり、その聖なる価値を体現する空間として博物館が意味をもっているようだ。宗教の公益をになうネットワークをかんがえるとき、疑似宗教的な聖なる活動も視野に入れて、市民活動とのつながりをうかがえればと思う。

三番目の小原克博氏の報告で特に印象的だったのは、宗教・宗派を超える祈りがデファクトの公益性として実現されるのかどうかという問題である。宗教の祈りには敵を滅ぼすという逆のベクトルもはたらいっているという指摘を踏まえれば、デファクトの公益をになう主体として宗教が優位な立場にあるのかどうか。記憶を留め、紡いでいくというような行為において宗教は優位なのか、市民運動や学術活動との関連も含めて明快にしていたできれば幸いである。

最後の鈴木岩弓氏の報告では、被災現場で活動している僧侶の姿を見て葬儀を依頼するとか、手と手を握り合って引導を渡すとか、共感を呼ぶような公益性のある活動の事例がいろいろとりあげられた。また東北大学には臨床宗教師を養成する講座が開設されたが、それも東日本大震災の復興活動のアクション・リサーチからはからずも浮上してきたように思われる。教団や宗派の宗教ではなく、また宗教者としてのアイデンティティを多少制限するような条件下でやっていく活動が何をめざしているのか、もう少し詳しくうかがいたい。

臨床宗教師の養成はたしかにアクション・リサーチから生まれたけれど、めざすところの活動はむしろリサーチ・アクション

ンの方向なのではないか。被災地域の人々にとって重い意味をもつ価値をあつかうわけだから、実践的な役割を担っている。「神殿」としての博物館は宗教施設ではないが、市民にとっての重要な価値を保全し継承発展させていくとすれば、それもリサーチ・アクションのほうになる。宗教や宗教研究の公益はこういったことも視野に入れる必要があるだろう。

シンポジウム記録

櫻井 治男

シンポジウムは、櫻井治男（モデレーター）による趣旨説明の後、稲場圭信「災害時における宗教者と連携の力―その意義と今後の課題―」、岡田真美子「宗教の公共力―自然とのネットワーキングを考える―」、小原克博「祈りの公益性をめぐる試論―三・一一によって照り出される「宗教」の境界―」、鈴木岩弓「東日本大震災後の『絆』再興にみる宗教の『ちから』」と題した各氏の発表があり、中牧弘允氏による発題者へのコメントが行われた。つづいて、各パネリストからコメントへの応答をもって終了した。時間的な制約により、会場からの質問は用紙でなされ、パネリストが適宜応答のなかを含むこととなり、論点を絞っての議論を展開することが出来なかったのはモデレーターの責任でありお詫びしたい。各パネリストの発題内容及びコメントは、本誌に別途掲載されており、詳細はそれらを参照いただき、本記録ではシンポジウムの発題要旨とコメン

ト及び応答の概要を記すこととしたい。

シンポジウムのテーマ設定の背景には、東日本大震災ののち一年半が経過したが、その被害の影響が、なお計り知れない状況として、私たちの眼前にあり、宗教研究としてこれをどのように受け止め、理解すればよいのか、また研究者による諸活動が行われている様相を知るとともに、そこから提起される問題や課題を共に考える機会として位置づけを図ったところである。さらに、その後も、各地でさまざまな自然災害が発生し、例えば東日本大震災の五か月後に襲った台風十二号による「紀伊半島豪雨」の影響は、本大会開催地から近い、三重県南部の東紀州地域をはじめ奈良・和歌山両県の海浜、山間地帯に及び、その爪痕が回復されず生々しく残っている。そこでは、宗教施設の被災、地域コミュニティの喪失などが加速するなかで、宗教がどのように語られるのかなど、無関心ではおれない実態状況もある。

ところで大震災後、国内外で多くの議論の場が持たれ、さまざまな学会において、シンポジウムや講演会が行われている。宗教という領域においても、宗教研究者、宗教者、宗教団体等が、多様な意見交換を進めているが、本シンポジウムでは、「公益」、すなわち不特定多数、相手を特定せずに、公共の利益をもたらすという点について、あらためて宗教は試されているのではないかという関心において問いかけを行うこととなり、開催趣旨に述べられた話題の設定が図られた。

稲場氏は、被災地へ自らもかかわり、また震災支援ネットワーク

ークの活動を通して見えてくる宗教の意義と課題を論じた。三・一一大震災における被災地での宗教の力を、資源力（場・物）・人的力・宗教力（祈り・安寧の支え）の観点から具体例を提示した。宗教者や研究者の連携がなされたこと、さらにボランティア活動など被災地における実際の活動のなかで生れてきた「共感縁」によるケアのあり方などを解説し、宗教的利他主義に基づく活動が独善的・閉鎖的になっていないか、また市民団体や行政・自治体の支援との連携関係における課題を指摘し、災害支援活動における研究者のアクション・リサーチの必要性を強調した。

この発題に対する中牧氏のコメントと質問であるが、氏は発題全体へのコメントにかかわる視点として、「公益」の捉え方を、コンピューター用語であるデジュリ（*de jure*）・スタンダードとデファクト（*de facto*）・スタンダードを援用し、「デジュリの公益」と「デファクトの公益」に区別する考えを提示した。前者は、行政や自治体など公的な権威に基づく標準を指し、後者は、市民の支持を受けた事実上の標準、実態のなかで捉えられる公益が想定されている。

稲場氏からは、三・一一後に様々な支援ネットワークが出現し、また活動に従事しながらも行き詰ってしまった聖職者もいることを紹介されているが、同氏が指摘する「共感縁」というデファクトな縁が持つ意味、果たす役割、そして今後どのように展開されるのか。ネットワークを通じて共感縁は永続なものへと醸成されていくのか。むしろデファクトの公益は限られた条件下で機能するもの、危機的状況下で意味を持つものと印象

づけられる。共感縁により出現した公益性が、行政・自治体というデジュリの公益と連携してどのようなものか。また稲場氏が指摘する今後の震災への備え、宗教者と宗教研究者の関わり方として、フィールドワークからアクション・リサーチへという行動性について、何ができるのかという点での意見が求められた。

コメントに対する稲場氏の応答は、共感縁が日本だけではなく、災害ユートピア論のように、人と人が助け合うというメタリテイは人間に共通して起こるものと捉えられる。被災地における共感縁がどのような展開となるかの問題として、ボランティア活動に注目すると、阪神淡路大震災ではボランティア撤退論の議論があったが、なおボランティアとして被災地との関係が続いている人もある。今回の場合、阪神淡路の時と異なり、ボランティア撤退の議論はあまりなく、宗教者や宗教団体のボランティア活動が続いていると見られる。しかし、地域コミュニティの再生が難しいと思われるなかで、例えば仮設住宅で一時的に生活していた人たちが、再会を求めて集うことがあるように、現場においての動きを注視する必要がある。また、宗教研究のあり方として、従来の価値中立的研究ではなく、災害支援などの活動が社会に益する重要な動きとして、研究者が共同してかわかることが大事であると考えているとした。

稲場氏が指摘する「共感縁」のあり方、また研究者の関わりという問題は、後の鈴木氏の発題とも関わるが、実態状況としての「公益」という論点が示されたことと、平常時における、地域に開かれた宗教施設のあり方を公益性の観点より問いかけ

る視点など、傍観者ではない研究者の立ち位置を考える発題であった。

岡田氏は、江戸時代の学者・山片蟠桃が述べた、金銀などを産出する山が人間にとり「宝山」となるゆえに神仏を勧請してはならないという主張を批判的に捉え、開発により神仏が追い出された山の姿などを説明しつつ、聖山・禁足地が有する環境保護力に注目する。山は山のもの、海は海のものとなす「神有地」という倫理が、私有地という新たな「所有」概念に取って代わったことによる自然破壊、公共空間から公害空間への変質として指摘した。持続可能な環境保護に、宗教倫理の再考が必要であること、大震災からの復興に行政と宗教施設がいかに関係性をもつか、宗教者がいかなる力を発揮して行くかへの期待が述べられた。

中牧氏からのコメントは、岡田氏の示した震災現場における社寺などの様相から、宗教が環境破壊の歯止めになっていることは明らかにしたが、一方で宗教ではなくとも、環境破壊の防止、自然環境といった聖なる価値を帯びたものを保全し守る、生き物を慈しもうという運動をしているNPOや市民の活動はある。その活動は宗教とよく似た側面が認められる。このような市民活動との関係性において宗教の公益はどのように捉えられるかを問いかけるものであった。

岡田氏は、会場からの質問である、神仏が山や自然にいることと所有の問題、津波による私有地のリセットと寺社などが流されたこととの理解のあり方、市民活動との関係について応答

がなされた。氏は、空間そのものが非常に聖なるものであり、実際に神社も流れた場所と流れない場所とがあり、後者の場合は不思議な場所としての認識がもたれてきたのではないか。今回の震災では、空間の履歴を残すものとしての宗教施設という認識があらためて確認されたのではないか。また、市民運動においても、聖なる空間の履歴に心をとめた活動が望まれるとの指摘がなされた。

岡田氏が指摘する宗教と環境倫理の問題は、実際の被災地における状況をさらに検証する必要性を指摘したものであるとともに、宗教と環境の問題が、それぞれ別個の立場による実践活動や異なる領域のテーマとして論じられるあり方を越え、総合的な議論の地平を提供する倫理観が指摘されたと捉えられる。中牧氏によるコメントのように、市民活動と宗教活動との関係性の問題は、稲場氏の発題とも関係し、またそうした一つのあり方が、鈴木氏が紹介した実践的講座設置の問題とどのように議論できるかに興味の持たれるところでもあった。

小原氏は、「祈り」の受け止め方が宗教・宗派により異なり、キリスト教を参考軸として、祈りと終末論、祈りの公益性を考えるために、個人的願望、社会的側面を含む祈りの内的力学、公益の範囲設定にかかる祈りの外的力学の問題を照射した。そして、公益性の議論が、日本という文脈における私的領域と公的領域との区別と両者の関係づけにかかる課題を指摘した。

中牧氏によるコメント内容は、特に宗教・宗派を越える祈り、繋がりをどのようにデファクトの公益として実現して行く

かという問題に関してであった。これについて小原氏は、越えるというベクトルと敵対するものを滅ぼすという逆のベクトルが働いていると指摘するが、そうしたなかで、「祈る」ことの公益性は果たして宗教が優位なのかどうか。市民運動の例にみられるように、記憶を紡ぐ、留めるという行為は大切であるが、宗教が優位で担って行くものなのかどうか疑問が残る点ではないかとの指摘がなされた。

コメントに対して小原氏は、宗教が記憶のために微妙なスパイスを利かすことの意義、また宗教が記憶の内容だけでなく、儀礼化、身体化という点で、その役割を有することを指摘した。また、死者という不在者への倫理を含めて未来世代への公益を捉えることの意義が説明された。さらに、会場から質問がなされた、宗教の公共性における多元性、他者性の認識の必要性については、それだけではなく、人間以外の存在者との間での多元的な関係構築の必要性を、ポスト世俗化論との関わりでは、日本における場合、近代的な公益からそぎ落とされた部分にあらたに光をあてることで、未来の資産としての価値体系を提示できるのではないかとの提言がなされた。

鈴木氏は、地域に根ざし前代から伝えられてきた宗教的習俗が、被災地においてイエレベル、地域レベルにどのように機能したかを、死・死者と向き合う場面、祭礼行事、宗教施設などを具体的に示し、「絆」の再興に関わる実態を説明した。さらに国立大学において「臨床宗教師」(仮称)講座が開設された経緯、そこでの宗教者の役割とその活動を中立的な立場で支援

可能な宗教研究者の関わりについて論じた。

この発題に対する中牧氏のコメントは、鈴木氏が例示した被災地で活動する僧侶の姿を見た被災者が葬儀を依頼する姿など、宗教者の活動が共感を呼ぶような公益的な活動と思われる。また、臨床宗教師の講座は、現実的な問題と直面する中から浮上してきたものであろう。宗教ではないけれども、宗教者にとってそのアイデンティティは多少制限されるであろうが、宗教者を糾合し、あらたな宗教的な活動の場としての講座を持っていることの意味、内容の紹介をさらに願いたい。鈴木氏をはじめ中牧氏自身の活動は、リサーチ・アクションとして、地域に関わっていかねばならないが、そこには宗教とも言えるし、宗教ともつかない、しかし重い価値を持つものがあり、それに対して宗教研究、宗教研究者がこれからどう考えるかが重要である。

コメントに対して鈴木氏は、臨床宗教師にかかる講座の設置が、大震災後に何ができるのかという模索のなかで求められた実践活動として、日本文化に根付いたチャプレンの可能性を考えていること、自らが宗教者でありながら、布教ではなく、宗教者としてケアを行う活動のあり方、地元の文化に寄り添ったケアの考究と課題に向き合っている状況が説明された。

鈴木氏が、実際の被災地において何が起きているかという観点から、当該地域の宗教民俗の根強さ、あるいは習俗変容との関わりなどの実例を取り上げ整理紹介された点、またそのなかで行政・自治体と宗教者・宗教団体、その媒介項となりうる宗教研究の位置など、今後状況がどのように推移するか注目さ

れると言えよう。

以上、各パネリスト及びコメンテータの方々の発言の一端を紹介するだけにとどまり、内容的に不十分であり、また本意にそむくこととなっていないか恐れるところであるが、シンポジウムを通して三点の課題が浮かびあがったように思う。一点目は、「宗教の公益」という場合の公益の概念は、事実性のなかでも理解される必要があるということ。縁や絆といった関係性とともに現れてくるもの、自然、聖空間、過去や未来における不在者への倫理的価値という文言にみられるように、認識の立ち位置を再考することにより、広がりをもつて捉え論じる重要性である。二点目は、公益の問題が、制度面や宗教内部で留められる問題だけではなく、一般社会における宗教への認識や意識、社会の動きとの関わりにおいて注視することの必要性である。三点目は、シンポジウムのテーマに示された「ためされる」という問いかけが、宗教研究や宗教研究者のあり方、すなわちアクション・リサーチあるいはリサーチ・アクションにせよ、何らかの活動・行動との関係において省察される問題性である。このことは宗教研究の立場という問題をもあらためて問いかねるところともいえよう。

登壇された各位にあらためて感謝し、報告としておきたい。